

# 「土型」の保存とその公開について

## －伝統的陶芸技術の公開と普及の方法－

森 下 愛 子

### 1. 序

日本各地には「自らの地域の伝統文化を残す」という意識がなければ、忘失されてしまう高度な技術、文化がある。殊に陶芸技術は、江戸時代後期から明治期にかけて各地でその土地独自の陶芸文化が花開いたが、その後の急速な産業化によって各地域での窯業が衰退、廃絶してしまった地域も多い。

これらの伝統文化の保護に関しては様々な手段が講じられた。第2次世界大戦により崩壊の危機に瀕した伝統工芸産業の復興のために1950（昭和25）年に「文化財保護法」が制定・公布され、1954（昭和29）年に改正されて第一歩を踏み出した。その基準は、第一に芸術的に特に高い価値があるもの、第二に芸能史や工芸史において特に重要な地位を占めるもの、第三に芸術的に価値が高く、または芸能史・工芸史において重要な地位を占め、かつ、地方的または流派的特色が際立っているものと定められる<sup>1)</sup>。国宝、重要文化財などの有形文化財においては、保存、修理に関しても成果がみえやすい。しかし、重要無形文化財に指定される伝統的な陶芸の技法は、発達した時代や、場所、原材料、製作工程等、或いは現代における「わざ」の高度な継承者の存在によってその姿は多様であり、未だ体系的な分類はなされていない。日本の伝統工芸文化が、国内外で注目される昨今、その技術や文化はある特定の地域のみのものではなく、日本各地に伝播されたものであることを提示すると共に、各地域の特色を活かす手段の一つとして、その土地独自の陶芸技術や文化の保護意識を高め、地域の活性化に繋がることが期待される。

その一環として、今回の報告では、「土型」に着目したい。「土型」とは、型による陶磁器の成形に用いられる道具である。「土型」は、粘土を素焼きしてつくられたものであり、陶磁器において同一の規格品、あるいはロクロでは成形できない変形皿などを量産するための成形道具である。次項で紹介する酒井田家の「土型」などは、年号、人銘、窯印、地名・窯場名が彫られており、貴重な資料といえる。また、明治の後半期には、石膏型が普及されたことにより「土型」は使用されなくなってしまったが、それゆえに、伝統的な陶芸技術を考察する上で、注目すべき道具である、と筆者は考える。

今回の報告では、注目されることの少ない伝統的な陶芸技術において使用される「土型」の存在をし、人々への理解を深める活動に取り組む美術館を紹介したい。

## 2. 土型を観る・研究するー酒井田柿右衛門家所蔵土型の例ー

江戸期からの土型が伝存する例として、佐賀県有田の酒井田柿右衛門家に着目したい。1999（平成11）年に「柿右衛門ーその様式の全容ー」展という展覧会が、佐賀県立九州陶磁文化館において開催された。この展覧会は1995（平成7）年から1998（平成10）年度にかけて行われた柿右衛門様式総合調査事業の成果を基に開催され、「柿右衛門」と称される作品群の研究を総括した展覧会であった。

柿右衛門と称されるやきものは、日本を代表する磁器の一つであり、当時は総称して「伊万里焼」と称された。江戸時代前期からオランダ東インド会社を通じて、西欧に輸出されたやきものである。1650年代、中国が明末清初の動乱期にあり、中国より磁器を輸入できなくなったオランダ東インド会社が目を向けたのが日本の肥前（現在の佐賀県・長崎県）の地域だった。彼らの求める水準に到達すべく急速に発展した伊万里焼は、ついに現在「柿右衛門様式」と称される白磁に余白を多く取る色絵の瀟洒な作品群を作り出す。柿右衛門様式の特徴は、オランダ東インド会社に「ミルキーボディ」（日本語で言う「乳白色」「濁手」）と称された素地である。意匠は中国の磁器や版本などから転用されたと思われるものが多く、ドイツのマイセン窯をはじめ多くのヨーロッパの窯で写しが制作された。明治時代には、江戸時代に漆器と共に西欧に通用した数少ない輸出品であったことが認知され、誇るべき日本の文化として「柿右衛門」が酒井田柿右衛門という人物像と共に概念化される。

大正期においては、日本陶芸史研究のターニングポイントともいえる彩壺会の第1回の講演録の題目に、『柿右衛門と色鍋島』が選択されたことも「柿右衛門」に対する当時の研究者の位置付けが想像される。彩壺会は、西欧的な古陶磁鑑賞の学術的方法を目指し、大河内正敏氏等東京帝国大学の学者を中心に結成された研究会であった。「柿右衛門」と「色鍋島」は、彼らの考える「鑑賞陶器」の典型であったと思われる。また、国定教科書に赤絵の逸話が掲載されるなど、抒情性の高い日本的な特徴をもつ美術品として国内外で評価される。

この佐賀県立九州陶磁文化館の「柿右衛門ーその様式の全容ー」展では、伝世作品のみならず、赤絵町遺跡出土の土型や陶片資料、また古文書や酒井田家に伝存する土型との比較等、総合的に柿右衛門様式を考察する画期的な展覧会であったといえる。展覧会の柱のひとつとして「酒井田家の土型及び推測される作品」というテーマが設けられる。酒井田家に伝来する土型の中で、銘のある土型は約半数にのぼる。これらは、土型と作品が一致すれば作品の制作年代を特定するのに有用であるのみならず、年号や持ち主が書かれた土型からは作品の変移を推測することができる。この展覧会の図録では、吉永陽三氏により酒井田家に伝来する土型が紹介され、銘と人名との照合、土型の使用法などが紹介された<sup>2)</sup>。

また、「柿右衛門様式総合調査事業報告書」においては、より詳細な土型のデータが報告される<sup>3)</sup>。以下、概略を参照したい。酒井田家の所在する南川原地域は、柿右衛門窯跡や南川原窯ノ辻窯跡があり、江戸時代を通じて有田の窯業をリードしてきた場所であるため、当時の酒井田家または南川原地域の窯の時期ごとの最先端の様式や、意匠等を知ることができる。酒井田家の土型の中で、年号銘が確認できたものは188点にのぼり、その内で最も古いものは「貞享二年」（1685）の年銘をもつ土型である。17世紀の銘をもつものは3点のみで、18世紀の銘が30点、19世紀の銘が116点、20世紀のもの

が39点と、19世紀の土型が全体の約62パーセントを占める。また、人名やその略称と推定される銘をもつ土型は363点と報告され、その内酒井田柿右衛門を示す「酒井田柿右衛門」、「酒柿」、「酒井田氏」、「柿」、「酒井田柿」、「酒井田柿右衛門」、「柿製」、などの銘のものが145点と多い。最古と最新年号の幅が最も大きい「酒井田柿右衛門」銘は「正徳五年」（1715）から「天保十三年」（1842）の年銘まで存在する。興味深い点は、これらの人名が付された土型のほとんどが江戸時代のものであり、明治期になると使用例が極めて少なくなるという点である。江戸時代に制作された土型には、器形や彫られた意匠以外にも、上記のような様々な情報が盛り込まれている。

十三代酒井田柿右衛門氏は、土型について「先祖の置き土産」と称され、酒井田家に伝来する土型について、

「土型は皿や鉢を作るのに使う。ろくろで皿や鉢のおよそを成形し、これを土型に押し当て、土型に刻んである線や文様を写す。（中略）今日の土型は大体石膏である。家の祖先の残した土型は素焼きである。石こうの土型は4、5年で使えなくなる。素焼きの土型は何百年ももちそうなほど丈夫である。」<sup>4)</sup>

「土型を調べると、作風の時代変遷や海外流出作品の身元が明らかになる。土型は無言だが、その蔵している意味内容は実に尽くしがたいところがあるのだ。そんな土型が江戸中期から明治末まで、肥前でどれだけ作られたろう。それらが集められ、保存されたら素晴らしいと思う。デザインの上でも、豊かな宝庫である。一般的にはかなり失われていようが、家では大事に長く保存していきたいと考えている。」<sup>5)</sup>

と語られる。明治後半頃から、石膏の型が登場したことにより土型は使用されなくなり、徐々に消失されてしまったが、そのような状況の中でも、酒井田家には1000点近い土型が保存されており、伝統的な陶芸技術を知る上でも大変貴重なものといえる。

本年1月2日から3月23日まで、この土型が紹介される展覧会が菊池寛実記念智美術館（東京都）にて開催された。【図版1「十四代柿右衛門展」ちらし 菊池寛実記念智美術館】「十四代柿右衛門展」と称されたこの展覧会では、酒井田家の土型が参考出品された。当代の十四代酒井田柿右衛門氏は、出品された土型に関し、

「柿右衛門のみならず有田全体の歴史の流れを知る上でも大切な一級資料であります。このたび、この土型を手にとって眺めていますと歴代柿右衛門や職人達の喜怒哀楽が伝わってきて江戸時代に思いを馳せることが出来ました。この土型を使い、従来の濁手素地用の素材を用いて、使用方法を少し変え、これまでと少し違う濁手素地の表情を出してみることを試みました。」<sup>6)</sup>

と語られ、【図版2「十四代柿右衛門展」・土型展示風景 菊池寛実記念智美術館】【図版3・4「十四代柿右衛門展」・「土型」展示風景 菊池寛実記念智美術館】のように、土型とそれを基に新たに

十四代酒井田柿右衛門氏が制作された作品と共に展示された。江戸期の土型を用いて、美しい濁手作品を誕生させた十四代柿右衛門氏の技を感じることができる。柿右衛門氏は、土型使用の濁手作品が泉山（佐賀県有田）の陶石の肌合いをよく伝えていることを実感されており、今後も土型を用いた「型打ち」の成形技術の保存とその復興にも取り組まれるそうである。このような技を継承する人物と美術館との協力によって、土型が一般に公開される機会が生まれ、そこではじめて現代の我々はその伝統的な技を眼にすることができる。

「十四代柿右衛門」展においては、

「十二代と十三代柿右衛門は、かつての濁手を復興させることこそ酒井田家の使命と認識し、苦心惨憺の上、遂に濁手の焼成に成功しました。そして十三代の晩年、濁手赤絵の技術は国から重要無形文化財総合指定の認定をうけ、さらに、十四代はその業を継承して工房を整備、日本一の色絵磁器の生産と技術の向上に全力を注ぎました。」

と紹介される<sup>7)</sup>。今後、土型をはじめとする成形技術の保存活動が有田の地域のみならず、各地へと広がることを期待したい。

また、九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センターにおいては、2005年より、酒井田柿右衛門家の「土型」調査が行われ、その報告が「形状（土型）のデータ収録とデータベース化に関する研究」としてまとめられている<sup>8)</sup>。この報告では、土型の3次元データの計測による完全な形状の保存と土型再現の成果が掲載されている。

以上のように、酒井田家の「土型」は、陶芸家と、研究者、そして公開施設である博物館・美術館が、各々その保存に対し高い意識を持たれていることにより、情報が発信され、次世代の人々への理解を深める活動が展開されている好例といえる。このような取り組みを行う地域の活動を、陶芸技術を中心に今後も紹介すると共に、記録保存していきたいと考えている。

### 3. 土型に触れる ―珉平焼土型を用いたワークショップの例―

日本各地には、指定を受けた技術以外にも、かつて優れた陶芸技術が多数存在していた。昨年の6月16日から9月2日まで、兵庫陶芸美術館において現在の淡路島で江戸時代後期から大正期にかけて生産された珉平焼に着目した展覧会「―珉平焼―淡路が生んだ幻の名陶」が開催された。珉平焼は、江戸時代後期の文政年間（1818～1830）に淡路島の南端、三原郡伊賀野村（現南あわじ市北阿万伊賀野）の庄屋であった賀集珉平という人物によって創始される。珉平焼は良質の陶土の入手が可能であったことから、陶器ではあるが、磁器質に近い陶器の生産に成功した窯場であった。天保年間の前期頃（1830～1837）には、京焼の陶工である尾形周平を招聘したことから、京焼の手回し轆轤による製陶技術と京焼の意匠が伝播される。

珉平焼は、江戸時代中期から国内各地で盛んに生産されるようになったもやきものの一種で、当時各藩の藩主ないしその地域の商人等により、「藩（国）ブランド」を掲げて生産された。江戸時代の

みではなく明治期以降の陶芸技術の基礎となるものも多く誕生した。近代陶芸史は江戸、その指導者的な役目を果たしたのが、京都と肥前有田の陶工達であった。彼らをどのように招聘するかによって、各地域の窯業の様相は変化し、各地の特性が生まれた。また、明治期の陶磁器に関する刊行物をみると、そのほとんどは各地域の窯業紹介がメインといってもよいほどである。その背景には、明治政府が目指した富国強兵をモットーに、殖産興業・輸出振興の国策があったと考えられる。初期のものとしては、1878（明治11）年刊行の『工芸志料』が挙げられるが、これはパリ万国博覧会に日本が参加するにあたり、日本の工芸の歴史を国内にも知らしめ日本の良さを工人等に自覚させようとの意図から伝統芸術の擁護の姿勢を掲げるものだった。また、来日した西欧人による日本の各地域の伝統文化に関する視察日記などもこの時期に多い。その中で今回は、明治期に来日したクリストファー・ドレッサーの文章をとりあげる。19世紀後半に活躍したイギリスのデザイナーであるクリストファー・ドレッサー（1834～1904）は、1876（明治9）年に、サウス・ケンジントン博物館より日本に寄贈するための300点に及ぶヨーロッパの工芸品を携えて来日する。当時の日本は、1873（明治6）年に開催されたウィーン万国博覧会、1876（明治9）年のフィラデルフィア万国博覧会などへの参加を通じて、諸外国から積極的に殖産興業のための資料となる物品（工業製品、機械類、美術工芸品）などを収集していた。このクリストファー・ドレッサーは、各地の工芸品や物産、社寺仏閣等の建築の視察を行った。その旅に同行した石田為武によって記された『石田為武筆 英国ドクトル・ドレッセル同行報告書』（以下、同行報告書と略す。1876（明治9）年－77（明治10）年・国立公文書館蔵）を参照したい。この『同行報告書』等の来日した外国人による文章は、殖産興業の社会的風潮の中で、西欧に通用する製品の輸出を意識せざるを得なかった当時の各地の窯業に対し、評価を行っている。『同行報告書』は、クリストファー・ドレッサーの当時の美術工芸品に対する評価、日本の輸出産業を発展させるための助言等が記されている。概要としては、一時の流行に左右されない輸出品目を作り出すことが物産の要である、との視点から陶磁器の評価を行った。日本各地で生産された陶磁器に下した評価は非常に厳しく、「極めて精巧ニアラズ」「輸出に適サズ」と述べた。しかし、その中でも京都栗田口焼の錦光山宗兵衛などの金欄手、高橋道八、幹山伝七、清水六兵衛などの京焼、また、織部焼などの「土もの」陶器はロンドンでも近年人気があると称し、購入している。

当時の珉平焼は、1871（明治4）年の珉平没後、珉平の甥である賀集三平と、珉平の親族が経営する淡陶社へ継承され、他の地域の窯業同様、欧米での万国博覧会等に出品するなど海外への輸出も行っていた。「第九 淡路陶器（珉平焼）」（『同行報告書』のうち）においては、

「(前略) 栗田其外ニ於テ製造スルモノヨリ精巧ナリ然リト雖モ此類ハ従来倫敦ニ於テ多方ノ輸入アルヲ以テ精良ノ品ヲ出スニ非ザレハ賞誉ヲ得難シ一種和蘭出ト名クル陶質ニシテ亀紋ヲ生セサルモノハ最モ上好ナリ此一品ノ如キハ未ダ倫敦ニ輸入セサルヲ以テ多ク之ヲ製造スベシ (後略)」

と評される。要約すると、京焼風の作品は、京都栗田口焼にも劣らず優れているが、ロンドンにもすでに輸出されている。クリームウェアと呼ばれるイギリス製の硬質陶器を意識した「和蘭出」と称される作品はいまだロンドン市場にもでていないため、多く製造するとよい、と述べる<sup>9)</sup>。



珉平焼窯跡の調査では、明治・大正時代の淡陶社製珉平焼というべき大量の遺物が出土し<sup>10)</sup>、それらの中には、「JAPAN」などの刻印のある陶片があり、輸出向けの製品も生産されていたことがわかる。また、明治20年代から明治40年代の年号が明記された350点を超える土型が出土している。土型からは、横に龍文のある小判皿が明治時代中期以降に珉平焼を代表する製品のひとつとして、大量に生産されていたことがわかる、と仁尾氏は述べられている。この小判皿の土型を用いた成形方法については『陶器講座』においても記載される<sup>11)</sup>。

「淡路焼の成形は、手轆轤を普通とせるも明治時代には洋式蹴轆轤などを試用せるものあり。その小皿の内面に龍紋の沈線彫刻を表す如きは、坪禮の半乾の時に於いてこれを凸型（明治時代には石膏製を用ふるに至ること、現今の如し）の上に伏せ、その背面より木槌で連打するものである」

このような用途で用いられた小判皿の土型を用いて、ワークショップも開催された。

江戸時代後期から明治期にかけて地方で誕生したやきものに着目した大々的な展覧会は少なく、「－珉平焼－淡路が生んだ幻の名陶」展は、伝世品と最新の発掘調査の成果から珉平焼を総括して展覧するという画期的な企画であったといえる<sup>12)</sup>。兵庫陶芸美術館は、丹波焼の盛んな地域に位置し、近くには登り窯等もあり、陶芸家も多く居住する地域であることから、一般の人々が陶芸技術に触れる環境として適した場所、といえる。【図版5 兵庫陶芸美術館遠景】

この「－珉平焼－淡路が生んだ幻の名陶」展の関連事業として、先に述べた珉平焼の土型を用いたワークショップが開催された。以下の文章は、兵庫陶芸美術館学芸員の梶山博史氏に作成して頂いたワークショップの報告である。ワークショップ開催の経緯と目的を紹介したい。

## ◎ワークショップ 「見る・聞く・作る 珉平焼三昧」

兵庫陶芸美術館 梶山博史

### ①ワークショップ開催の経緯

このワークショップ（以下WSと略す）は、2007（平成19）年6月16日から9月2日にかけて、兵庫陶芸美術館で開催した「珉平焼－淡路が生んだ幻の名陶－」展の関連事業として企画・開催したものである。今回このWSを開催するまでの経緯は下記の通りである。

- （１）当館が2005（平成17）年10月に開館して以降、ワークショップを行う施設やセクション（当館の組織では事業課）があるにもかかわらず、展覧会の内容と関連するWSを行っていなかった。従ってその端緒となるWSを行いたいという展覧会主担当（梶山）の強い希望があった。幸いにもWSの実務を担当することになる事業課の職員や陶芸指導員が、WSの内容に理解を示し、全面協力を申し出てくれた。
- （２）本展覧会副担当である学芸員の仁尾一人（2006（平成18）年4月に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所から当館に転属）が、2005（平成17）年度に明治時代後半から大正時代前半にか

けての珉平焼窯跡付近の発掘調査を担当し、報告書を作成している。仁尾から報告書に未記載の、小判皿成型型をはじめとする出土遺物があり、それらが使用可能であることを伺った。窯跡出土の成型型をWSで使用することは、県有の埋蔵文化財を有効活用することになる。また、その実物をWSで一般の参加者が使用できることは、兵庫県立の施設である当館における、本展覧会ならではの企画となる。そこで仁尾が窓口となり、遺物を保管している兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現在の兵庫県立考古博物館）へ出土遺物の借用を依頼し、理解と協力を得ることができた。

- (3) 梶山、仁尾、当館の陶芸指導員である清水剛の三者で、WSの内容について協議、決定を行った。WSの試作、準備、実施など、実際の制作に関わる作業は、清水を中心とした当館事業課が行った。
- (4) 龍文が陰刻された小判皿を制作することにしたが、それは以下の理由による。

【図版6 珉平焼緑釉龍文小判型皿 個人蔵】

【図版7 珉平焼龍文小判皿土型 兵庫県立考古博物館蔵】

- 〈1〉龍文小判皿が、伝世品としてもっともポピュラーな珉平焼を代表する器種の一つであるため。
- 〈2〉型成形・型施文が、同一規格品を大量に生産するのに効率的であるという、陶磁器生産における重要な要素を含んだ技術であることから型を使うWSが、珉平焼のみにとどまらない、陶磁器への広い理解につながると考えたため。

## ②告知方法

美術館ホームページ、展覧会チラシ（関連事業として記載）

## ③概要

- (1) 実施日：6月30日（土）、8月18日（土）  
両日とも14時～16時（ギャラリートークを含む）
- (2) 対象：各日とも30名
- (3) 受講料：1100円（作品送料込）
- (4) 申込方法・〆切：6月23日（土）まで（事前申込制・先着順）

## ④内容

### (1) スケジュール

- 14:00～14:45 学芸員による展覧会ギャラリー・トークを聞く
- 15:00～15:15 当館スタジオ（工房）に移動し、学芸員がスライド（パワーポイント）を使用して、「陶磁器における型の歴史」の解説を行う。【図版8 解説風景 兵庫陶芸美術館】さらに出土した成型型、素焼陶片、ピンハマ型等の説明を行う。
- 15:15～16:00 制作

## (2) 制作の手順

### 【WS当日】

- 〈1〉当館の陶芸指導員が制作方法を解説。【図版9 陶芸指導員実演風景 兵庫陶芸美術館】
- 〈2〉参加者に粘度塊を配り、たたら成形により均等な厚みの粘土板を切り出す。1人あたり2枚制作。
- 〈3〉粘土板を型に押し当てて、上から軽く叩く。【図版10 作品制作風景 兵庫陶芸美術館】
- 〈4〉型からはみ出た粘土を取り除く。
- 〈5〉型からはがす。
- 〈6〉黄釉・緑釉を選んで付箋に記載し、作品に貼る。

### 【WS後日】

- 〈7〉陶芸指導員が端部をきれいに調整
- 〈8〉乾燥
- 〈9〉素焼
- 〈10〉施釉
- 〈11〉焼成
- 〈12〉発送

## (3) 使用機材等

- ・珉平焼窯跡出土小判皿型 15点
- ・珉平焼窯跡出土小判皿陶片 20点（素焼15点 施釉5点）
- ・ピンハマ型5点
- ・たたら成形用板、ワイヤー、ゆみ、カンナ
- ・調整用工具
- ・粘土：信楽系の土（製品名は丸二陶料の仁清土）

## ③報告

珉平焼の小判形皿は、実際には鉛を主成分とした低火度釉が施されているが、今回のWSでは技術的・労力的な制約から、黄釉として酸化第二鉄を発色材料とした黄瀬戸風の高火度釉、緑釉として酸化銅を発色材料とした織部風の高火度の緑釉を使用した。なお、事前に陶芸指導員が試作をしてくれたことにより、WS当日およびそれ以後の作業が滞りなく進んだ。

実施前は募集定員に達するかどうかという心配の声が内部からあったが、実際は募集告知直後の早い段階で定員に達し、募集締め切りとなった。予想に反して参加希望が多かった要因として、出土した型の実物を使うという点が、参加者にとって大きなメリットとなったのではないかと考えられる。

技術的・労力的な制約から、底部は無釉とした（本来は全面施釉）。これは、骨董品として流通している珉平焼の小判皿と、WSの成果品とが、将来混同されないようにするため、区別できるようにしたという配慮も含んでおり、無釉の底部には、参加者のサインを彫らせた。

出土した成形型は廃棄されたものであるが、今回のWSにおいても、龍の文様を細部までくっきり



と施文することができた。精緻な文様を彫り出した型を制作することが可能であった当時の技術力に、携わった職員一同が舌を巻いた。

企画段階から、ただWSをして終わるだけでは意味がないと考えていた。従って、珉平焼および陶磁器について参加者が少しでも理解を広げられる内容にするべく、参加者にはギャラリートークへの参加を義務付け、珉平焼に関する理解を促した。さらに陶磁器における型に関する簡単なレクチャーを行い、型成形・型施文の歴史と、型成形・型施文という技術が、同一規格品を大量に生産するために効率的な陶磁器制作技術であるということについて解説を行った。

参加者には年齢制限を設けなかった。これは、ろくろ等の経験的な技術などを必要としない、型押しという極めて単純な技法であるため、年少者でも参加・制作が可能であると判断したからである。結果的に小学校低学年から高齢者までの幅広い年齢層が参加し、制作を行うことができた。

参加者がほぼ定員を満たしたこと、展覧会の内容とWSの内容とを密接にリンクさせたことなど、当初想定していた目標はほぼクリアできたWSだったと認識している。

上記のような実際の土型を用いたワークショップは、梶山氏の報告にもあるように、珉平焼そして陶磁器の理解を深めたいという美術館学芸員の意図、出土された土型の使用が可能であったこと、陶芸技術の指導を行う陶芸員の存在、これらの要素が揃った結果、開催が可能となったといえる。美術館という一般に広く公開される役割をもつ施設で、美術館の学芸員と陶芸指導者、そして考古博物館の協力によって、伝統的な陶芸技術において使用された土型の存在が紹介されたこと、また、展覧会の内容とワークショップの内容が直結していること、ワークショップの一環として展覧会解説や、土型の歴史のレクチャーが織り込まれていることによって、より陶磁器に近づくことができる。ワークショップという活動が、幅広い層の人々が陶磁器への理解を深める活動へと繋がったことは特筆すべきである。

#### 4. 終わりに

今回の報告では、酒井田柿右衛門家所蔵の土型と、出土遺物である珉平焼の土型が、どのように保存され、一般の人々に公開される上で活用されたか、という事例について報告を行った。注目されることの少ない「土型」の存在は、伝統的な陶芸技術に触れることができる貴重な存在である。日本の陶芸技術やその美意識は、主に江戸時代から国内各地で盛んに生産されたやきものによって形成された。その指導者的な役目を果たしたのが、京都と肥前有田の陶工達であった。彼らをどのように招聘するかによって、各地域の様相は変化し、特性が生まれる。つまり、現在我々が想像する、伝統的陶芸技術の一要素が形成されたのである。本稿でとりあげた土型からも、上記の例のような形でその地域の人々が築き上げた特性に触れることができる。その土地独自の陶芸技術や文化の保護意識を高め、地域の活性化に繋がる活動を行う人々に着目し、報告を行った。このような活動を行う施設、団体や個人の活動を積極的に紹介することが、他の地域における伝統文化に対する理解や意識の向上に繋がることを願い、今後も伝統的な陶芸技術に関する情報収集、記録保存を行いたい。

## 〈謝辞〉

本稿の執筆にあたり、ご指導並びにご協力頂いた佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏、柿右衛門窯の岩崎純二氏、菊池寛実記念 智美術館の花里麻里氏、高田瑠美氏、兵庫陶芸美術館の梶山博史氏に深く感謝申し上げます。

## 《注》

- 1) 『無形文化財 民俗文化財 文化財保存技術 指定等一覧』文化庁文化財部伝統文化課 2008年
- 2) 吉永陽三「酒井田柿右衛門家所蔵の土型について」「柿右衛門ーその様式の全容ー」1999年 佐賀県立九州陶磁文化館
- 3) 「柿右衛門様式総合調査事業報告書」佐賀県立九州陶磁文化館 1999年3月。現在、柿右衛門の技術や意匠は重要無形文化財に指定されており、柿右衛門製陶技術保存会にて保持される。柿右衛門という名称には、酒井田柿右衛門という人物名を示すと共に、様式名、窯元名をも併せもつ。
- 4) 『私の履歴書 文化人9』 日本経済新聞社 1984年 p 240
- 5) 『私の履歴書 文化人9』 日本経済新聞社 1984年 p 241
- 6) 「十四代柿右衛門展」配布資料より 2008年1月2日～3月23日開催 菊池寛実記念 智美術館
- 7) 「十四代柿右衛門展」プレスリリース資料より 2008年1月2日～3月23日開催 菊池寛実記念 智美術館
- 8) 釜堀文孝・小川規三郎・上田勝也・古賀裕子・濱川和洋 「形状（土型）のデータ収録とデータベース化に関する研究」 九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター 2007年3月
- 9) 「和蘭出」とドレッサーが形容した一群の作品は、江戸時代後期以降、京焼に見られるものでクリーム色の器体に異国趣味的な人物や植物等の意匠が描かれる。「一珉平焼ー淡路が生んだ幻の名陶」展図録・作品解説参照。また『石田為武筆 英国ドクトル・ドレッセル同行報告書』に関しては、佐藤秀彦「クリストファー・ドレッサーの来日と英国の寄贈品」郡山市立美術館研究紀要第2号 2001年参照。
- 10) 仁尾一人「珉平焼の生産と流通ー発掘調査の成果からー」「一珉平焼ー淡路が生んだ幻の名陶」展図録 兵庫陶芸美術館 2007年参照。
- 11) 「淡路焼の技術」『陶器講座』第21巻 1937年 雄山閣 参照。
- 12) 「一珉平焼ー淡路が生んだ幻の名陶」展図録 兵庫陶芸美術館 2007年参照。

## 主要参考文献

### ①柿右衛門関連

#### 〈展覧会図録・書籍〉

- ・「十四代柿右衛門」菊池寛実記念 智美術館 2008年
- ・「柿右衛門ーその様式の全容ー」 佐賀県立九州陶磁文化館 1999年
- ・肥前の色絵「その始まりと変遷」展 佐賀県立九州陶磁文化館 1991年

- ・『有田町史 古窯編』有田町史編纂委員会編 1989年
- ・『柿右衛門』鍋島直紹・水町和三郎・手塚文蔵・永竹威（柿右衛門調査委員会）編 金華堂 1957年
- ・『柿右衛門・鍋島』（陶磁全集第23巻）鷹巢豊治 平凡社 1955年

〈報告書・論文〉

- ・竹内順一「日本陶磁研究史序説（一六）彩壺会の役割（その一）」『陶説』592日本陶磁協会 2002年
- ・竹内順一「日本陶磁研究史序説（七）－外からの視点－」『陶説』576 日本陶磁協会 2001年
- ・『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会 2000年
- ・『柿右衛門様式総合調査事業報告書』佐賀県立九州陶磁文化館 1999年

②珉平焼関連

（展覧会図録・書籍）

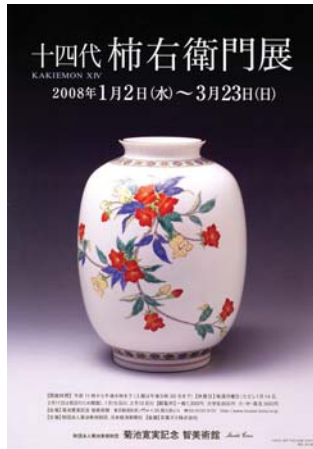
- ・「－珉平焼－淡路が生んだ幻の名陶」展図録 兵庫陶芸美術館 2007年
- ・満岡忠成他編『日本やきもの集成』七〔近畿二〕 平凡社 1987年
- ・大西林五郎編『日本陶工傳（日本陶器攷証宝典）』 松山堂書店 1920年

（報告書・論文）

- ・第6回四国城下町研究会「四国・淡路の陶磁器Ⅲ－珉平焼の生産と流通－」 2004年
- ・五代尾形周平「尾形周平略系」『陶説』375 1984年

## 「土型」の保存とその公開について

### 図 版



【図版 1 「十四代柿右衛門展」 ちらし  
菊池寛実記念 智美術館】



【図版 2 「十四代柿右衛門展」 土型展示風景  
菊池寛実記念 智美術館】



【図版 3・4 「十四代柿右衛門展」 土型・十四代酒井田柿右衛門作品 展示風景 菊池寛実記念 智美術館】



【図版 5 兵庫陶芸美術館 遠景】





【図版 6 珉平焼・緑釉龍文小判型皿 個人蔵】



【図版 7 珉平焼龍文小判皿土型  
兵庫県立考古博物館蔵】



【図版 8 「陶磁器における型の歴史」解説風景  
兵庫陶芸美術館】



【図版 9 ワークショップ陶芸指導員実演風景  
兵庫陶芸美術館】



【図版10 ワークショップ解説風景 兵庫陶芸美術館】

【図版 2 - 4】：菊池寛実記念 智美術館より提供

【図版 5 - 6】：與倉智大氏撮影

【図版 7 - 10】：兵庫陶芸美術館より提供



**[Summary]**

## Preservation and Exhibition of Clay Molds: Exhibition and Popularization of Traditional Techniques of Ceramic Art

MORISHITA Aiko

“Clay molds” are molds used in making ceramics. It is made by firing unglazed clay and is used in making standardized objects or objects that cannot be made with a potter’s wheel, such as dishes with unique shape, in great numbers. The use of clay molds disappeared in the latter half of the Meiji period when plaster molds became popular. However, because of this very reason the present author thinks that it is a very important tool when considering traditional techniques of ceramic art.

Clay molds in the collection of Sakaida Kakiemon Family were introduced extensively at “Kakiemon — The Whole Aspect of the Kakiemon Style,” an exhibition held at The Kyushu Ceramic Museum in 1999. Approximately 1000 clay molds have been inherited in the Sakaida Kakiemon Family, the oldest of which bears the inscription 貞享二年 (1685). These clay molds are interesting not only because they enable one to speculate the changes in the manufacture of ceramics but also because there are inscriptions of the year or the owner.

In this report, the existence of clay molds, which are now seldom noticed, is pointed out and the efforts of museums that attempt to deepen people’s understanding about clay molds are introduced.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage  
Number 2  
2008

Publisher:  
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo  
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第2号

平成20年3月28日印刷

平成20年3月31日発行

編集 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所  
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員	無形文化遺産部 部長	宮田 繁幸
	音声・映像記録研究室長	高桑 いづみ
	無形文化財研究室長	鎌倉 恵子
	成城大学講師	星野 紘
	法政大学能楽研究所 教授	山中 玲子

発行 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所  
〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43  
電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所 2008

National Research Institute for  
Cultural Properties, Tokyo